死をまねく手相

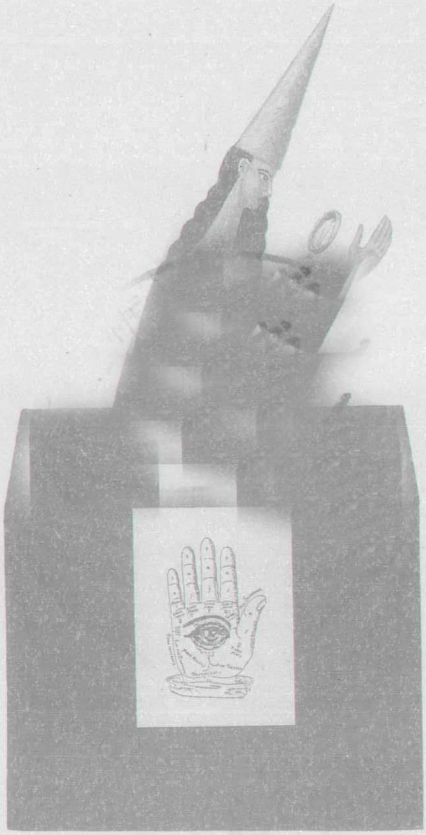
姉小路 祐

Yū Anekōji

ねく手相

姉小路祐

寄贈



双葉社

死をまねく手相
著者—姉小路 祐　発行者—井上功夫
発行所—株式会社双葉社　東京都新宿区東五軒町三—二八　郵便番号一六二
電話東京（〇三）五二六一—四八一八（営業）
（〇三）五二六一—四八三三（編集）
振替・〇〇一八〇—六—一一七二九九
印刷所—慶昌堂印刷株式会社　製本所—株式会社川島製本所
落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえします。
定価・発行日はカバーに表示してあります。
©姉小路 祐　一九九六年　Printed in Japan

ISBN4-575-23262-9 C0093

目次

第一章　凶敵　5
第二章　沢風大過　55
第三章　死の占い　101
第四章　僕は犯人じゃない　143
第五章　もう一つの殺人事件　182
第六章　ドラマチック・マジシャン　219
第七章　強い絆　254

装画・装幀／北見　隆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

死をまねく手相

第一章　凶　敵

1

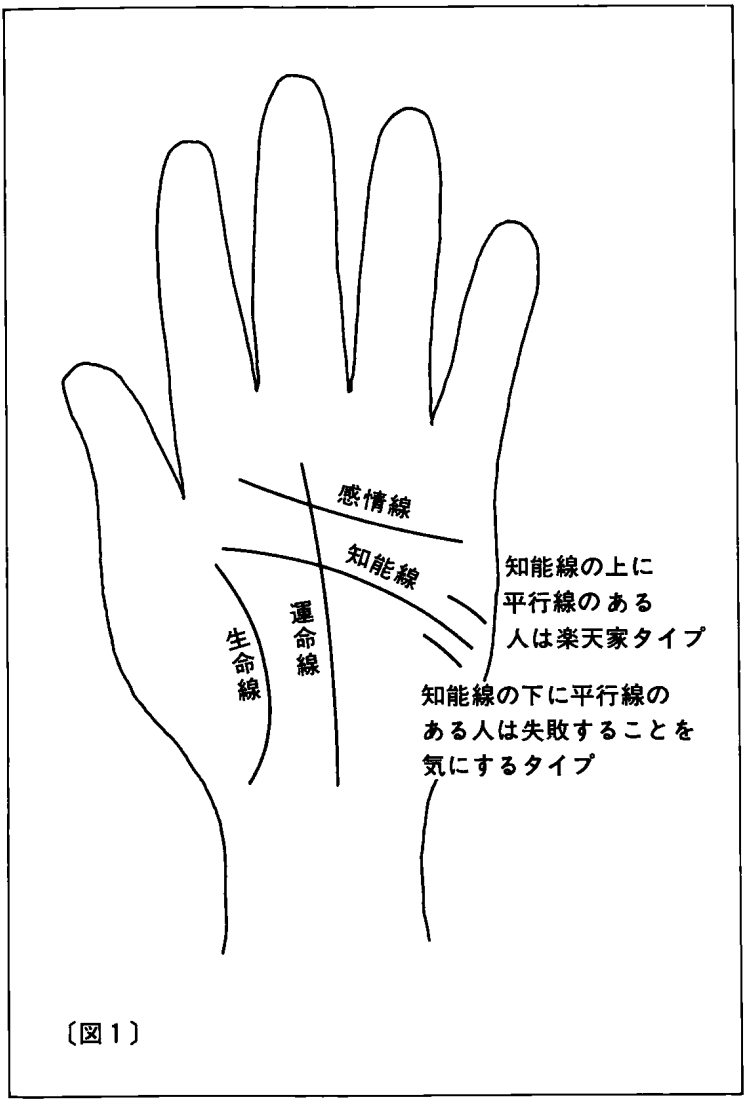
七月の暑い日差しがようやく落ちて、渋谷の街は赤銅色の夕焼けに包まれていた。渋谷の街を歩く夏服ファションの若者たちの大半は、アイスクリームや氷をきょうは一度は口にしただろう。その若者たちのメインストリートともいうべき渋谷センター街の一本南に、通称文化村通りがある。センター街よりも道幅が広く、銀行、デパート、薬局といった建物が並び、センター街に比べて落ち着いた雰囲気がある。

北白川晶子は、文化村通りのいつもの場所に、〝店舗〟を開いていた。彼女の職業は街占師——街角で通行人を相手に手相占いをしている。

「近いうちに、私にリストラは来ないかね」

きょうの最初の客は、中年のサラリーマンだった。二十四歳と若くてしかも美人の晶子には、よく男の客が付く。それも酒に酔ったオッサンが冷やかし半分でというのが多い。しかし、この

中年男は真剣だった。
「リストラが来るかどうかという細かなことまでは、正確にはわかりません。でも、大きく悪い変化があるような徴候は手相上は見られません」
サラリーマンの運命線には、不吉の徴候を示す×印などは見られないし、障害を示す線も出ていない。
「でも、とても心配なんだ。何しろ会社が事業縮小の方針を出して、同期入社の者が二人もリストラの憂き目に遭っているからね」
このサラリーマンの場合は、四大基本線（生命線・感情線・知能線・運命線）の一つである知能線の下に、もう一本平行して走る線が目を引く。知能線の下に平行線のある人は、何をするにしても失敗したときのことを考えて行動するタイプだと言われている。周囲から見るとそれほど重大と思えないことでも、本人にとっては失敗すると人生が終わったくらいに捉えてしまう悲観的な性格である。（図1）
「あまり考え過ぎてはいけないと思います」
晶子は、男のうしろにルイ・ヴィトンのセカンドバッグを持ったＯＬ風の女性が立ったのに気づいた。
晶子の場合は、最初に付いた客が若い女性なら、その日はツイているというジンクスがある。しかし、きょうは残念ながら、女性客は二番目だ。
「しかし、考え過ぎと言われても、うちの会社は非情なところがあるから、やはりよく考えてお


感情線
知能線
運命線
生命線
知能線の上に
平行線のある
人は楽天家タイプ
知能線の下に平行線の
ある人は失敗することを
気にするタイプ

〔図１〕

かないと……」

中年サラリーマンはなおも不安を打ち消そうとしなかった。

「でも、よく考えれば、リストラは避けられるのですか?」

「いや、そうじゃないけど」

サラリーマンは首を振った。

「だったら、思い悩むだけ損じゃないですか」

そう言いながら、晶子はサラリーマンの後ろに立つ若い女性に向かって、揉み上げを伸ばした若い男が話しかけているのに気づいた。渋谷の街では、ナンパは日常茶飯事の部類にも入らないごくありふれた行為だ。しかし、自分の女性客が待っている間にナンパされるのを見るのは初めてだ。もっとも、「新宿の母」として有名な占い師のKさんのところは、ズラリと並ぶ女性にちょっかいを出す男がいたために、数年前から男性が列に並ぶのは禁止になっている。Kさんに見てもらいたい男性は、女の子に自分の代わりに並んでもらい、順番が来たところで交代するという手数を踏まなければならないのだ。

ちょっと、困ります——と揉み上げ男に声を掛けようとした晶子は、揉み上げ男が女性に地図のようなものを差し出しているのを見た。もしかしたら、単なるナンパではないかもしれない。この渋谷は、フーゾク関係やAV女優のスカウトも日本一だと聞く。

「じゃ、リストラはないと思っていいんですね」

晶子の視界を、中年サラリーマンが遮った。あくまでも念押しをしないと気が済まないタチの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ようだ。
「そう思ったほうが、あなたにプラスですわ」
「左手しか観なくていいんですか」
「ええ。あたしの場合は利き手でないほうの手を観ます」
どちらの手を観るかは占い師の流派によって違う。手を組んで上になった側を観るとか、男は右手で女は左手とか、両方とも観るが左手が先天を現わし右手が後天を示すとか、方式は様々である。晶子が教わったのは「利き手でないほうで観る」というやり方だ。利き手のほうは、どうしても物を持つ機会が多いために、物理的な皺が入ってしまい紛らわしくなり、そのうえ手の皮が厚くなるために細かな線を消してしまうのがその理由だ。
「もう一つ訊きたいんだけど、今度の人事異動で転勤の打診があったとして、それを拒否してもクビにはならないでしょうね。子供の学校のことがあって、転勤は避けたいんですよ」
サラリーマンは左手を突き出してきた。彼にとっては、人生の一大事を相談しているわけだ。うしろの女性のことなど、まるで視界にない。
「それは、実際に転勤の打診があってから悩まれたらどうですか」
「転勤は私にはない、という意味ですか？」
サラリーマンは真顔で訊いてくる。冷やかし半分の酔客とは違うだけに、むげには扱えない。
「残念ながら、そこまで手相ではわかりません」
晶子は、そう答えながら、揉み上げ男が別の紙を取り出して女性に手渡しているのを見た。紙

には〝これぞ　究極の占い〟とワープロ文字で大きく書かれてある。どうやら、揉み上げ男は同業者のようだ。

「たいしたことは答えてもらっていない気がするな。占いって、いったい何のためにあるんですか」

サラリーマンは首をかしげた。

「占いは超能力じゃありません。だから、わかることとわからないことがあります。でも、わかることについては、自分の性格や運をしっかりと把握したり、調子に乗らないように心掛けることで、落とし穴に陥ることが防げるのです。それが、占いの最大の効用だと思います」

晶子は自論を述べた。「あなたの場合は、必要以上に物事を気にし過ぎるのです。そのためにかえって木を見て森を見ないことになっているのではありませんか。そこに注意なさることで、もっとプラス思考の生き方ができるように思います。年下のあたしが、生意気なことを言いますが」

サラリーマンはようやく納得の色を顔に浮かべた。けれどもその間に、女性は、揉み上げ男に連れられるようにして、近くに停めてあった4WD車に乗り込んでいった。

晶子にはもはやどうすることもできなかった。サラリーマンから見料二千円を貰いながら、4WD車のナンバーを憶えるのが精一杯だった。

皮肉なもので、そのあとしばらく客が付かなかった。

晶子の〝営業所〟の前を、顔見知りの易者が通った。晶子の三十メートルほど西で筮竹(ぜいちく)を構え

る初老の占い師・西山善門（にしやまぜんもん）だ。

「こんばんは」

この渋谷で〝営業所〟を開いて八カ月目の晶子は、いつの間にか善門と言葉を交わすようになっていた。

「やあ、年がいくと、どうも手洗いが近くなっていかんよ」

善門は苦笑いをした。渋谷駅のみどりの窓口横のトイレを、善門も晶子も使っている。

「善門さん。あたし、さっき許せない同業者を見かけたんです」

晶子は、揉み上げ男のことを話した。

「その男なら、わしもおととい、あんたと同じ目に遭ったよ。並んでいる女性客をさっさと持って行かれたんじゃ。『こんな老いぼれよりも、うちのほうが絶対当たるんだから』と露骨に言う声が届いたよ」

善門は口惜しそうな顔をした。

「あたし、あんな強引なセールスは許せませんわ」

占い師にはこれといった規制法はない。誰でも資格なしに始めることができ、自由に店が開けて、宣伝や客集めにも特に制約はない。しかし、他の店に並ぶ客を横取りするかのように持って行くのは、モラルにもとる行為だ。

「横取りだけじゃなくて、あの男はヘンなことをやっていたぞ。先週の土曜日の夕方のことじゃったが、あいつは車の中から、わしの姿を写真に撮っておったのじゃよ」

「善門さんの写真を？」
「まるで何かの調査員のような感じで、写真を撮ったあとメモまでとっておった。そのときから、気になっていたのじゃよ」
先週の土曜日の夕方は、晶子はセーラー服がかわいい女子中学生三人組から進路の相談を受けていた。彼女たちの手相をかわるがわる観るのに熱中していた晶子は、善門が受けたと同じことをされていても、気づかなかったかもしれない。
「あたし、どうも嫌な予感がします――」
晶子は、暑い季節に不似合いなひんやりとした汗が額に滲むのを感じた。それが、この事件のささやかな前兆だった。

「やあ」
それから三十分ほどして、晶子の前に小丸新介（こまるしんすけ）が現われた。新介は、晶子の中学時代の同級生で、〝卒業後十年ぶりの同窓会〟で去年再会して以来、友だち以上恋人未満のつき合いをしている。
もっとも新介のほうは恋人としてつき合って欲しいようで、それっぽい申し出を一度口にしたこともある。
「今、会社の帰りなの？」
晶子は、新介が手にした社名入りの大型茶封筒に目をやりながら訊いた。新介は、大手出版社

のヤマト書店「ハイスクールライフ」編集部に勤めている。
「ああ。締め切り日が近づくと、編集者の土曜日曜なんて、どこかに吹っ飛んでしまうよ」
女子高生をターゲットにした同誌は売れ行き好調だ。晶子は、新介の紹介で、同誌の巻末にある〝占いコーナー〟を担当している。占いをしてもらいたい読者が手相のコピーを送ってきて、その手相を紙面に載せたうえで晶子が診断を下すという斬新さが受けて、〝占いコーナー〟はなかなかの好評だ。
「実は、先月号に取り上げて載せた女子高生から、ちょっと気になる手紙が、手相のコピー付きで来たんだ」
新介は、茶封筒の中に手を入れて、ごそごそと探した。
「先月は、確か石川まどかという子だったわね」
「そうなんだ」
「ええ、これだわ」
新介が取り出した手相のコピーを観ながら、晶子は頷いた。
「やっぱり、手相の内容とかはちゃんと憶えているわけ？」
「そりゃ先月観たばかりなら、まだ記憶にあるわ」
晶子は、師の飛騨紫絵から「一度観た手相は、全部頭の中に入れなさい」と教えられている。手相は、変化をするという特徴を持っている。同じお客さんが来たときに、前の手相との対比をして診断することがアドバイスのための重要なポイントになることがあるというのが紫絵の言い

分だ。変化をするということは、それだけその人に顕著に訪れている現象だと考えていいからだ。

晶子は、師の紫絵のようなコンピュータ並みの手相記憶力はない。けれども、一カ月前なら射程距離だ。

「この手相は、親子関係に対立が観られる相だったわ」

晶子は一番印象に残っていた特徴を口にした。石川まどかの手相は、月丘といわれる手のひらの右下から伸びて運命線に合流する線があった。これは、寵愛線と呼ばれる線で、これが出ている人はそれほど多くない。(図2)

運命線は、手首側から中指側にかけて(つまり下から上へ向かって)、年齢順に起こる内容を示していると解釈する。これを、歴年法という。寵愛線が運命線の中間あたりで交わっているときは、成人してからパトロンや支持者を得ることを示す。そして、彼女のように運命線の一番下あたりで合流しているときは、親からとても大切にされたことを教えている。

ところが、まどかの手相にはもう一つの特徴があり、知能線と感情線の間に、反抗線が観られた。文字どおり、ちょっとしたことでもすぐ反抗し、周りにいる人を怒らせてしまう線だ。

晶子は、彼女の寵愛線と反抗線から「親子関係の対立」をハイスクール誌上で指摘したのだった。

「これが、昨日うちの編集部に送られてきた手紙だよ」

新介は、隅っこにリスの絵がかかれた封筒を取り出した。宛名は、ハイスクールライフ編集部

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook